

**主 題：なぜクリスマスをお祝うのか**  
**聖書箇所：イザヤ書 9章6節**

今朝皆さんと一緒に考えたいのは、きょうのタイトルにもある一つの質問です。それは「なぜ私たちはクリスマスをお祝うのか」ということです。この質問はここにいる多くの人たちがこれまで何度も耳にし、考えたことがある質問だと思います。恐らくここにいる多くの皆さんが迷いなくこう答えられると思います。クリスマスは私たちの救い主イエス・キリストが誕生されたことを覚え、そのことを感謝するためにお祝うのだと。なぜクリスマスをお祝うのかという質問を私たちが聞くと、そんな当たり前のことを今さら聞くなんてという思いが私たちの頭の中に浮かばないでしょうか？ここにおられるイエス・キリストを救い主として、主として信じ歩んでいる者にとって、こんな質問は何の変哲もない、当たり前に聞こえるものかもしれません。またもしこの中に、なぜクリスマスをお祝うのかについて今まで深く考えたことがないという方がいるのであれば、少し自分の生活の周りを見渡してください。クリスマスシーズンになれば、私たちが出かけしていく町中、また私たちが見るテレビのCMで流されているクリスマスの歌、私たちは余りにも聞き慣れてしまってそれらの曲が一体どんな意味を持っているのかを深く考えないかもしれません。しかし、そんな曲の中にはイエス・キリストの誕生をお祝う歌、例えば“きよしこの夜”などの賛美歌が普通に流れています。また、これも私たちにとって当たり前のことなので深く考えないかもしれませんが、私たちが使っている西暦というものはキリストの誕生された年を基準にして紀元前、紀元後と数えています。ですから私たちがなぜお祝うのかということ深く考えていなかったとしても、私たちが注意して周りを見渡せば、イエス・キリストの誕生、その事実が古くから特別のものとして扱われ、人々の中で祝われている様子を見ることが出来ます。

しかし、問題はそういった歌やそういった事実が余りにも古くから祝われてきていることによって、イエス・キリストの誕生の知らせというものが時がたつにつれて、私たちにとって何の価値もないような、当たり前で深く考えない意味を持たないようなものになってしまっているのです。イエスの誕生？私には関係ありません、クリスマス？特に大きな意味はないです。強いて言うなら1年のイベントの一つにすぎませんと。何ら大したことのない、当たり前の存在なのだ時に私たちは思うのです。皆さん、クリスマスは大したことのないものなのではないでしょうか？いやもっと言えば、イエス・キリストの誕生というものは私たちにとって当たり前に捉えてよいものなのではないでしょうか？今からみことばを見ていくに当たって、少し自分の心に問いかけてください。今皆さんは心からイエス・キリストの誕生をお祝うクリスマスを楽しみにしているのでしょうか？恐らくこれから皆さんがクリスマスのシーズンを迎えるに当たって、数多く楽しいことが皆さんを待っていることだと思います。例えばプレゼントを交換したり、イルミネーションを見に出かけたり、恋人や大切な人と出かけたり、また家族や友人と食事をしたり、たくさん楽しいことが私たちのことを待っていることだと思います。しかし、そんな中であって、今あなたはどんなものよりも、このイエス・キリストの誕生をお祝うことを心から楽しみにしているのでしょうか？私たちは確かなになぜクリスマスをお祝うのか、その正しい答えを知っているかもしれません。でもその答えが何か私たちに当たり前のようなものになっていないのでしょうか？今イエス・キリストの誕生、その真理が私たちの心を揺るがず、私たちに感動をもたらすようなものではないのでしょうか？それともそれ以外のものに私たちは楽しみを見出しているのでしょうか？

**★ なぜクリスマスをお祝うのか：六つの理由**

きょう皆さんと見たい聖書箇所はイザヤ9：6です。この箇所は多くの方がこれまで一度は耳にしたり、読んだりされた有名な箇所の一つだと思います。イエス・キリストの生まれる約700年前に神に逆らい、そしてその罰を受けていたイスラエルの民に対して、預言者イザヤがメッセージを記しました。そのメッセージとは、旧約聖書を通して約束され続けてきた救い主イエス・キリストが誕生するというものでした。救い主として生まれる神の子イエス・キリストが一体どのようなお方なのかということをおこの9：6はわかりやすく私たちに教えてくれています。そして、この箇所を通して私たちは同時になぜ私たちがクリスマスをお祝うのか、もっと言えば、なぜ私たちはイエス・キリストの誕生をお祝わなければいけないのか、その六つの理由をおこの9：6の中に見ることが出来ます。ですからどうか皆さん、これから内容を考えていくに当たって、是非最初にした質問を自分の心に問いかけ続けてください。なぜ私たちはクリスマスをお祝うのか——。この中にも今まで一度もクリスマスの意義を考えたことがないと言われる方がいるのであれば、ぜひきょう本当のクリスマスの意味を知って帰ってください。この真理は必ずあなたの人生を変えるからです。そして、もしもう既に正しい答えを知っているとされる皆さん、もう一度ともにイエス・キリストが誕生されたことのすばらしさをぜひともに考え直してみましよう。

テキスト、イザヤ9：6には「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」と記されています。

### 1. イエスが人としてこの世に来られたから 6節a

私たちがクリスマスを祝う一つ目の理由はイエスが人としてこの世に来られたからです。6節の最初にこう書かれていました。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。」と。ここでまず皆さんに注目してほしいのは、約束された救い主は「ひとりのみどりご」、また「ひとりの男の子」としてやって来られるということです。要するに、この約束された救世主はひとりの子ども、人間として、そして性別は男の子として生まれるのだということをこのテキストは私たちに教えてくれています。また、人間として、男の子として生まれるだけではなく、救い主として来られる方は続いて「私たちのために生まれる」、「私たちに与えられる」のだと約束されています。ここで「生まれる」、「与えられる」という二つの動詞が用いられていますけれども、これはどちらも受け身形で書かれています。要するにこの約束された救い主というものは、偶然生まれて来るのではなく神の計画に則って神が与えられるということです。ヨハネ3：16に「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」と書かれています。神が約束された救い主、イエス・キリストの誕生は決して何かの偶然起きたことではありませんでした。偶然ではなく神がその恵みのわざとして、私たちのために意図をもって与えられたのだとここに記されているのです。この救い主はご自分の計画に沿って、人として私たちにのために来られたと。

#### ◎ なぜイエスは人としてこの世に来る必要があったのか？

さて、イエスは人としてこの世に来られた。私たちがこう聞いても余りに聞き慣れたことで何ら驚きを表わさないかもしれません。でももし私たちがイエスは人として来られたのだということに何の感動も、何の喜びも感じないのであれば、もう既に私たちはイエス・キリストの誕生のすばらしさを見落としています。そもそも一体なぜ神であるイエスは人としてこの世に来る必要があったのでしょうか？どうしてイエスは100%人としてこの地上に来る必要があったのでしょうか？

#### ① 私たちの大祭司として憐れみを示すことができる

もちろん幾つかの理由は考えられます。イエスが人としてこの世に来られたからこそ私たちの大祭司として私たちにあわれみを示すことができるということも聖書に書かれています。ヘブル4：15の中に「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」と記されています。イエスが人としてこの世に来られた、だから私たちにあわれみを示すことのできる大祭司となることができると。

#### ② 私たちと神との間の仲介者となれる

また二つ目にイエスが人としてこの世に来られたからこそ、私たちと神との間の仲介者になれるということも聖書の中に記されています。そのことが1テモテ2：5の中に「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。」と記されています。

#### ③ 私たちのクリスチャンとして歩みにおいて模範にすることができる

私たちにあわれみを示すことのできる大祭司であるだけでなく、私たちと神との間の仲介者になれるだけでもありません。人としてイエスが来られたからこそ、私たちがクリスチャンとして歩む、その歩みにおいて模範となることもできるのだということも同じく聖書に記されています。1ペテロ2：21の中に「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。」と記されています。イエス・キリストが人として来てくださったからこそ大祭司になることも、仲介者となることも、私たちの歩みの模範となることもできたのです。

#### ④ 罪の身代わりとなることができる

その三つも大切なことですが、何よりも大切なのはイエスが人として来てくださったからこそ私たちの罪の身代わりとなることのできたのだということが聖書に記されています。ヘブル2：14-15、17に記されています。「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。……そういうわけで、神のことに、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。」と。神が聖書を通して私たちに教えてくれている真理は明白です。ローマ3：23は「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、」と言います。聖書はここにいる私たちすべての人は生まれながらに神の怒りを受けるべき罪の性質を持って生まれたのだと教えます。聖い義なる神の前に私たちはひとりとして正しい者はいない

のです。私たちは罪人として生まれ、それゆえに神の憎むべき罪を犯し続けてきているのだと聖書の中には書かれています。そう聞いて、もしかするとある人はこう考えるかもしれません。罪と言っても私はよい人であろうと努力しています。できる限り正しいことをしようとしています。周りの喜ぶことを心がけて、私はいい人として歩もうとしていますと。もしそのように考える方がおられるのであれば、聖書が教えることはこういうことです。私たちがどれだけ人の目に喜ばれることや正しいことをしていたとしても、それが間違っているか正しいかの判断をされるのは完璧な聖い神だということです。

私たちは多くの場合、自分の心の中にあることをほかの人に知られたくはありません。しかし、私たちの神は私たちの心の中すべてをご存じです。そしてその心の思い、その行い、罪に応じて神はさばきを与えられる。だからこそこにいるだれひとりとして言い訳することはできないのです。私はそんなことはしていません、そんなことは思っておりませんと神の前に言うことはできません。神はあなたのことをあなたより知っておられる。私たちはいつも自分中心の生活をしてきました。この世は私たちに自分の幸せを求めたらいい、自分が満足することを求めたらいいと言います。自分が欲しい物を手に入れるためだったらうそをついても構わないし、自分の持っていない物を持っている人を見たら、別に妬んでも構わないと。自分が自分の幸せを第一に考えればいいとこの世は教えます。私たちが気づかなければいけないのは、私たちは親からも先生からも、だれからもそんな思いを抱くようにとか、そんな行為をするようにと教えられたことはないということです。私たちは罪人として生まれたからこそ生まれながらに神の前に正しくない行為をするのです。そしてその結果、私たちは生まれながらに罪人であるがゆえに、ここにいるだれひとりの例外なく、この神からの栄誉を受けることはできない。ただ神の怒りを受けるだけにふさわしい存在なのだと言います。すべての人が自分の犯した罪の結果、神から罰を受ける必要があったのです。でもイエスが私たちと同じように人としてこの地上に来てくださったからこそ私たちがかわりに私たちの受けるべき罰を十字架の上で受けることができたのです。人として来られたイエス・キリストの流された血によってのみ神は私たちの罪を取り除くことができたのです。

私たちには私たちと同じような人としてのイエス・キリスト、救い主が必要でした。そしてそのイエスはみずから進んで、私たちに値することのないような救いを与えるために人としてこの地上に来られたのです。イエスが人として来てくださったからこそ私たちはこのクリスマスをお祝いするのです。

## 2. イエスが主権者だから 6節b

さて、二つ目の理由はイエスが主権者だからです。「主権はその肩にあり」とテキストは続いていました。ここで使われている「主権」ということばは、王様や君主が権力や支配力を行使するという意味を持ったことばです。要するに、このみどりごととして、人として生まれて来る救い主は同時に主権者であり、支配者であるということをご自分でこのテキストは意味しています。皆さん覚えておられると思います。イエスが天に上られる前大命令と言われるものを弟子たちに下す前に、こう彼らに話しかけました。マタイ28：18で「わたしには天においても、地においても、いっさいの權威が与えられています。」とイエスは言われました。ここでイエスが言わんとしたことは明白です。自分は天においても、また地においてもすべてのものにおいて自分の思いどおりにする權威を持っている、イエスはそのことを弟子たちの前で明らかにされたのです。

この救い主イエスはすべての支配者であられる。だからこその地上における政府や権力はすべて主イエスの支配下にあって、また人類の歴史上起きたすべてのこともイエス・キリストの神の御手のうちに起きたことだと言えます。だからたとえ私たちの周りで私たちの目には理解できないようなことがあったとしても、神の支配の外側で起こることは一切ない。このイエスこそ主の主、王の王であられるお方なのだ。こんな主の主、王の王、主権者であられるお方が、偉大な力を持った王が約束された救い主として、人としてこの地上に来られた。だからこそ私たちはこのクリスマスをお祝いするのです。主権者がこの地上に来られたからです。

## 3. イエスが不思議な助言者だから 6節c

三つ目はイエスが不思議な助言者だからです。その続きに「その名は『不思議な助言者』と書いてありました。このことばは「すばらしい」とか「驚くべき」、「並外れた」ということばと「知恵にあふれた助言」ということばが組み合わさってできたことばです。並外れた知恵を持った助言者だと。この当時王の周りには政策を決めたり、王様が困った時にアドバイスを与えることのできる助言者や議員と呼ばれる人たちがいました。ここで言わんとしていることは、王の周りにはいるようなどんな助言者に比べても、この生まれて来る「不思議な助言者」であるみどりごに比べれば大したことがない。この生まれて来るみどりごこそ、並外れた知恵にあふれた、ほかのどんな助言者にもできない助言をすることができるのだということがここに明らかにされています。

皆さん少し考えてみてください。皆さんが何か困った時、何か疑問を覚えた時に真っ先にアドバイスを求めるのは一体何でしょう？ある人は自分の家族かもしれませんし、ある人は信頼する友人かもしれ

ません。ある人は職場の同僚かもしれませんし、また最近であれば私たちはインターネットに頼ることもできます。確かにそれらは別に悪いわけではないですし、多くの場合は役に立つと思います。しかし、それらはいつでも完璧でいつでも正しい助言を私たちに与えてくれるものではありません。時にインターネットも間違っただけを言います。時に私たちの信頼する人でも間違っただけの助言を与えることはあります。ここで私たちが覚えなければいけないことは、このみどりごイエス・キリストはすべてのことをご存じであり、わからないことが全くない神だということです。

コロサイ 2 : 3 の中に「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」と記されています。ここで言わんとしていることは明白です。このイエス・キリストのうちにすべての知恵と知識が隠されているのだと。このお方がすべてのことを知っているがゆえに、イエスがほかの助言者にアドバイスを求めることも、まただれかから足りない知恵を補うこともないのです。このイエス・キリストはすべてのことをご存じな「不思議な助言者」だと。確かに私たちにとっては一見よいように思えないようなことは私たちの周りにたくさん起こります。しかし、そんな中であっても、主はいつも私たちのベストを知ってくださっている。私たちの最善をいつもこの主は知っておられると。

あのヨブという人物は家族に恵まれ、当時自分の住んでいた地域において最も財産を持った恵まれた人でした。物質的にも豊かであったヨブという人物は、同時に神様の前を正しく、いつも神の前を喜ばれるように歩んでいました。一見すれば順風満帆な人生を送っていました。しかし、そんなヨブはある日家族も財産も自分の健康もすべて失ってしまいました。ある時は人がうらやむようなものはすべて持っていたヨブはある日すべてのものを失ったのです。人間的に見れば絶望的な状況だと言うことができるでしょう。実際、ヨブは苦しみの中にいました。ヨブは絶望の中にいました。しかし、そんな彼がそういった苦しみを通して学んだことがヨブの一番最後、ヨブ 4 2 : 1-2 に「ヨブは主に答えて言った。あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。」と記されています。ヨブは苦しんだのです。しかし、わかったことがありました。それは神にはどんなことでも成し遂げることができるということでした。

同じようにパウロもローマ 1 1 : 3 3-3 6 に「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」と述べています。パウロもよく知っていました。神の知恵というものは決して人間の頭では理解することはできないと。でもたとえ彼にとってわからないようなことが起きていたとしても、それらはすべて神の御手のうちの中に起こっていることなのだということをパウロはよく知っていました。私には理解できない、そんなことがあったとしても、神はご自分が何をされているのかをよくわかっておられる。そんな確信をパウロは持っていました。

このことが記されたのはコリントの手紙が書かれた後でした。Ⅱコリント 1 1 章の中でパウロは自分が経験したさまざまな迫害やさまざまな困難について列挙しています。むち打ちにあった、飢えを経験した、難船を経験し寒さに凍え苦しんだと。人間的に考えればさまざまな不平や不満をぶちまけてしまうような苦しみ、私たちが考えれば私たちに絶対耐えることのできないような困難を経験したパウロが言ったことが先ほどのローマ 1 1 : 3 3-3 6 です。パウロはよく知っていました。私にはよく理解できなくても、神はご自分が何をされているのかをよくわかっておられると。その確信をパウロは死ぬまで抱き続けました。

私たちのために生まれたみどりご、すべてのことをご存じであるだけではなく、私たちにとっての最善をいつも知っている、それだけではなく、そんな方が私たちのためにいつも最善のものを備えてくださる。いつも最善な助言を私たちに与えてくださると。そんな方が私たちのために生まれたからこそ私たちはクリスマスを祝うのです。

#### 4. イエスが力ある神だから 6 節 d

四つ目の理由はイエスが力ある神だからです。この約束されていた方、この約束されていたみどりごは人として生まれたただけではありませんでした。この方は力ある神だったということです。

イエスは神でした。イエスが神であったということは、ご自分がこの地上を歩かれている時にさまざまな奇跡を通して周りの人にお示しになりました。例えばイエスと弟子たちはガリラヤ湖にあって、船に乗って湖を渡っていました。その時に彼らはひどい嵐に巻き込まれました。私たちも知っているように、十二弟子の中のペテロを含めた 4 人は漁師で、天候のことにおいても船を操ることにおいてプロでした。しかし、そんなプロたちが余りにも激しい嵐であったゆえに、「主よ。助けてください。私たちはおぼれそうです。」とイエスに向かって叫んだとマタイ 8 : 2 5 に記されています。。百戦錬磨の漁師たち

も耐えることのできないそんな恐ろしい激しい嵐を彼らは経験していました。もう私たちはこれには耐えることはできない、もう死んでしまうと。そんな嵐の中にあった弟子たちとイエス。イエスがこの嵐に対してとった行動は次のように記されています。「イエスは言われた。『なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちだ。』それから、起き上がって、風と潮をしかりつけられると、大なぎになった。」と。百戦錬磨の漁師たちでも手に負えないようなそんな激しい嵐をイエスは一体どのようにして鎮められたでしょう？イエスが単にことばによって静まれと言っただけでこの激しい嵐は大なぎになったのです。イエスが片手の萎えた人に手を伸ばしなさい、そのように命じるとその手が治りました。また病気で死んで四日たっていたラザロの墓の前でイエス様が「ラザロよ、出てきなさい」、そのように叫ぶと死んでいたラザロはよみがえったのだとヨハネ 11：38－44に記されています。

イエスは神の子でした。だからこそ人間にはあり得ないような力を、奇跡を示されたのです。このお方は自分のどんな計画でも成し遂げる力を持っておられます。そしてこのお方は先ほど見たように、私たちに必要な助言をいつも与えてくださるだけでなく、私たちがその助言に従っていくことができるように、その力をも私たちに与えてくださるのです。神の力が私たちを助けてくださると。そんな偉大な力ある神が私たちのために、私たちとともにいるために生まれてくださった。だからこそ私たちはクリスマスを祝うのです。

#### 5. イエスが永遠の父だから 6節 e

五つ目は、イエスが「永遠の父」だからです。ここに書かれているように、このみどりごと呼ばれる者は「永遠の父」永遠の父と名づけられています。ここで間違っほしくないのは、この「父」と呼ばれているのはイエスが父なる神様だと言っているわけではありません。聖書の教える神様は、父なる神、子なる神、聖霊なる神の三位一体の神が神です。では一体このイエスを指して父なる神と言ったのはどういうことだったのでしょうか。この当時多くの王様たちは自分たちのことを民を支配する、民を養ったり、民を導く父だと表現していました。自分たちは民にとっての父なのだ、そのように王様たちは自分たちのことを表していました。私たちもよく知っているとおり、父親と子供の関係というものは明白です。父親は子供をやさしさをもって正しい方向へと養ったり導いたりします。同じように私たちもこの神と父と子の関係にあるということも聖書は私たちに教えてくれています。例えばローマ 8：15には「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父。』と呼びます。」と記されています。イエス・キリストはすべての主権者です。ただそれだけではなく私たちに必要な最善の知恵を与えてくれる。でもそれだけではなく私たちがそのことを果たすことができる、そのような力も備えてくれる。でもそれだけではない。こんなお方が私たちをいつも養い、導いてくださるということをお約束してくださったのです。単に私たちのことを養い、導いてくださるだけではなく、先ほど見たようにこの父は「永遠の父」とそのように表現されていました。私たちとともに永遠にいつもこの父はともにいてくださるのだ、昔も今もそしてこの先未来もどんな時代にあっても、神は私たちとともにいてくださると。いつも最善を知っている、いつも正しいことを成し遂げてきた、そのような神が私たちとともにいてくださる。

私たちには先のことはわかりません。でも私たちの理解をはるかに超えた、この先のことを知っている神が私たちをいつも守り導いてくださると。たとえどんな状況に置かれていたとしても、私たちのことをいつも愛し、私たちのことをいつも守り、ケアしてくれるそんな神が私たちといつもともにいて守ってくださいと。そんな幸せが、そんな約束が私たちには与えられているのです。こんなお方が私のために、また皆さんひとりひとりのために与えられた。だからこそ私たちはクリスマスを祝うのです。

#### 6. イエスが平和の君だから 6節 f

そして最後の理由は、イエスが「平和の君」だからです。この救い主であるみどりごは神と人との間に平和をもたらすことができることが聖書の中に記されています。イザヤ 53：5には「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」とあります。一つ目の理由の時にも見ました。ここにいる私たちひとりひとは生まれながらに神に敵対する者でした。罪ゆえに神の怒りを受けて当然の者だったのです。当然そこには平安や平和というものは一切ありませんでした。しかし、この約束されたみどりごは私たちの争いの原因であった罪を十字架の上にあって解決してくださった。私たちに対して積み上げられていた神の怒りはこのお方によって取り除かれたのです。ですからローマ 5：1には「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」と記されています。本当の平和はこの救い主が地上に人として、また神としてやって来られたからこそもたらされたのです。

さて、もしこの中にまだイエスを自分の救い主として受け入れていない方がいるのであれば、きょうこのイエスが一体だれなのかということをよく知ってから帰ってください。これまで見てきたとおり、

聖書は単純明快に真理を教えてくれています。ここにいる今まだイエス・キリストを知らない方が何も感じていなかったとしても、その問題を何も深刻に思っていなかったとしても、聖書が教えるのはあなたは神の前に怒りを積み上げているということです。今あなたは神と敵対関係にある。そしてあなたがこの聖い神の前に立つ時に、必ず神はその罪をさばかれる。私たちが感じないからとか、そんなことを思っているはいけません。決して軽く見てはいけません。なぜならこのお方は神です。私たちの心の中もすべてご存じの神が、ご自分がすると言われたことは必ず成し遂げられてきた神が、あなたが罪を持っているのであれば必ず罰を与えるとされたのです。ですから、この救い主を知らないのであれば、どうかきょう自分の罪を悔い改めてイエス・キリストの救いのすばらしさを知ってください。

そしてまた同時に、イエス・キリストのすばらしさを知っている方は、イエス・キリストにおいて持つことのできる本当の平安というものを味わってください。私たちは心の中で平安を求めています。インターネットを見れば、どうすればいつも心が乱れないでいられるかとか、どうしたらいつでも喜んでいられるかとか、どうしたらいつも楽しんでいられるか、そんな秘訣についてたくさん書かれています。呼吸法を変えてみましょう、運動しましょう、ネガティブな思考はやめましょう、人と比較しないようにしましょう、感謝するようにしましょうとさまざまな秘訣をもって平安を持とうとします。聖書はこのイエスこそが「平和の君」であり、この方のみ本当の平安があるのだと教えています。本当の平安というものは自分の置かれている状況やポジティブになることから得られるものではありません。そんな平安は決して長続きしません。しかし、私たちがこの世をすべて支配され、主権者であられる、王であられる、神であられるお方に信頼を置いて、そんな神が私たちのために犠牲を払って人として来られたということ覚え、この力ある神に守られながら歩んでいくのであれば、この世が与えることのできない本当の平安を神があなたに与えると約束してくださっています。神の与える平安はどんな状況にあっても心のうちに持つことができます。なぜなら必ず神がともにいてくださるからです。神がすべてのことを支配されていると、皆さんも信頼することができるのです。この神にすべてを委ねてきょうを歩んでいくことができます。

今回メッセージを通して私たちは一つの質問を考えました。なぜ私たちはクリスマスを祝うのか——。クリスマスは決して大したことのない私たちにとって当たり前ものではありません。この世界の主権者であられる全知全能の神が私たちが決して支払うことのできない罪の代価を支払うために人としてこの地上に来てくださった。私たちがそれに何か値したからそのようなことをしてくださったのでは決してありません。神が私たちが愛してくださったがゆえにひとり子を送ってくださったのです。ですからどうかこのクリスマスを迎えるに当たって、本当のクリスマスの意味を、イエス・キリストの誕生のすばらしさをぜひ心から喜ぶ者になってください。そして、このすばらしい福音のニュースをぜひ周りの人に伝える者へと変わり続けてください。イエス・キリストの誕生を心から感謝して、いつも自分の人生をすべてイエス・キリストに捧げる、そのような者としてともに歩んでいきましょう。